
陸士訓練学校のドタバタな日常

ラモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陸士訓練学校のドタバタな日常

【著者名】

ラモン

N5850X

【あらすじ】

管理局の魔導師を目指す少年少女たちが集う、第4陸士訓練校。これはその訓練校の日常を描いた、ドタバタ学園コメディである。基本的に「Jまけえことはいいんだよー」の精神でお読みくださいませ。

皆様の暇つぶしごとにどうぞ。

第1話『朝8時だよー 全員集合!』(前書き)

いよいよ始まりました、コラボ小説『陸士訓練学校のドタバタな日常』。

他作者さんのキャラクターが沢山出演していますので、その全員を魅力的に書けるかどうか心配ですが、全力でやってみたいと思います。

ではでは、『陸士訓練学校のドタバタな日常』始まります。

第1話 「朝8時だよー 全員集合!』

時空管理局が運営する第4陸士訓練校。

この陸士訓練校は、様々な意味で数ある訓練校の中でも名の知れた訓練校だった。

様々な意味で、というのは文字通り良い意味も悪い意味も含んでいる。

良い意味は、数多くの優秀な陸士たちを輩出していること。
講師陣に未だ現役で最前線に出ている、歴戦の管理局員が居ること。

総じて訓練校とは思えないレベルの人間が揃っていること。

これだけ聞けば、さぞかし優秀な訓練校なのだと思うだろう。
しかし、この第4訓練校の管理局内の評判は、実はそれほど良くはなかつたりする。

何故か。

それは まあ、これから語るこの第4陸士訓練校の日常を見て
いただければ分かることだらう。

陸士訓練学校のドタバタな日常

第1話　『朝8時だよ！　全員集合！』

「やっぱ時代は“けいおん！”だと思つわけよ。

正直音楽とか全くわからん俺だが、とりあえず澪たんと同じベー

ス買つた。

田指せ武道館ライブ！！　むしろ世界進出！

訓練校のとある教室の中央で、短めの金髪を揺らす少年　ハヤト＝ロックウェルが新品のベースを持ち、得意げな顔をしてポーズをとつていた。

ただし持ち方は完璧に間違つてたりするけれど。

「放送終了と共にネットオクに出品されてる未来が見えるぞ。それとお前右利きじやん。

つか、お前先々週まで「時代はハチワンドライバー」とか言つて、将棋やってたじゃねーか」

そんなハヤトを見て溜息を吐くのは、ハヤトと同じ金色のくせつ毛を持つ少年、ルーク＝リーゼンベルグだ。間違つた持ち方のままポーズを決めるハヤトを見よつともせず、手元で広げた漫画に視線を落としたままルークは言葉を続ける。

「先月あたりは「時代はARIA」とか言つて「ソラヲ練習してたし、その前は「時代はバンブーブレイド」って剣道やってたし、もうオチが見え見えすぎて泣けてくるわ」

「いや、今度は本氣だ… もうと『こたんだよ、俺は澪たんの生まれ変わりだつて…』

「死んでねーし、いやそもそも生きていねーし、お前男だし」

「ふざくんな！ 濶たんはこいつでも生きてるんだよ… 俺の胸の中で…！」

「末期的な会話すんじゃねーよ。あと“けこおん…”なりあずこもんだる」

「ちつぱこに用はない…」

「おつぱこに貴賤はない、ただそこにおつぱこという概念があるだけ。

その程度の事にも気づかんとは情けない、いい加減田を覚ましたらどうだハヤト？」

「大きいは正義！ 貴様こそ田を覚ませルーク！」

何故か芝居がかつた口調でさやーさやー言ふハヤトとルーク。そんな2人の言い合ひを遠くから眺めつつ、オレンジと紫のオッドアイを持った少女が、セリロングの黒髪を揺らして溜息と共に小さく呟く。

「……あやつらは向をしょーもない会話をしとるんじや、朝も早いとこ'うじ」と「元」

やや年寄り臭い口調で呟いた少女の名は、高町ゆず。

自分の机に肘を突いてハヤトとルークのやり合っこを眺める姿は、やや年寄り臭い口調も相まって本来の年齢よりも年上のよつた印象を受ける。

「知らないわよ。3馬鹿のスケベ共の会話なんて」

「ティア、それは酷いよ～……まあ、あたしもそいつ思ひナビ」

呆れ返った表情をするゆづの言葉を受けて溜息と苦笑をもらすのは、橙色のツインテールが特徴的な少女　ティアナ＝ランスターと、青いショートカットの活発そうな少女、スバル＝ナカジマの2人。

そんな3人の視線の先で、ハヤトとルークの議論は白熱していく。もちろん、果てしなくしょーもない方向に。

「なんでもちつぱいを否定するー?…これでは、ちつぱいの需要が減つてエロゲが少なくなる!」

「H口の冬が来るだー!…」

「ちつぱいを肯定する者は胸ならば何でもいことしか考えていない、

だから抹殺すると宣言した！

「HロガHロに罰を下されるなどと……。」

「私、ハヤト＝ロックウルが肅清しようとしたのだ、ルーク！！！」

「Hガだよそれは！…！」

「むしろHロじやね？」

「誰がつまご」と叫ぶと

間違つた方向に熱くなる2人のボルテージが最高潮に達した頃、見計らつたようなタイミングでハヤト達の教室の扉が開き、短く揃えられたプラチナブロンドを揺らす少年が入ってきた。

少年の存在に気づいたティアナ達は笑みを浮かべ、彼の名前を呼びながら手を振る。

「リオス、おつはよー！」

「おはようなのじゃリオス」

「おはよ、今日は遅かったわね」

「あ、うん。おはよう、スバル、ゆず、ティアナ」

名前を呼ばれた少年 リオス＝コーネルドは、誰もが見とれる

ような柔らかな微笑みを浮かべ、それから自分の登場にも気付かず、
いまだに言い合いを続いているハヤトとルークへと視線を移しながらティアナ達の隣になる自分の席へと腰を下ろした。

そして視線をハヤトとルークに固定したまま、ティアナ達に向かつて短く尋ねる。

「…………また？」

「また、よ。朝っぱらから元氣よね」

「ほんこのう。もう少し静かにしてもバチは当たらないやつだ」

「あはは。まあ、あたしは元氣でいいなって思ひナビ

ティアナとゆずが揃って嘆息し、スバルは苦笑いを返す。

「ほれリオス、ほよひ上めてぐるのじや。あやつりの後始末はお主の役目じゃろ」

「ゆずの僕に対する認識は甚だ遺憾だけど、話題でしかないのが悔しい……」

「遺憾とかばぢりでもよこ、こみゅひ上めできやれ

「ううう…………なんで幼馴染つてだけで僕が…………」

「宿命と書いてさだめ、とうやうやしじゃな。なに、元ちよつと行つて

止めるだけじゃろ？

何も姉上と戦つて勝てと言つてゐる訳でもなし、男なりをたつと行くのじや。ほれほれ

追い払つよつなゆづの手つきに促され、リオスはガッククリと肩を落とし、トボトボと重い足取りでルークとハヤトの方へと近づいていく。けれど2人は既に周りの事など気にならない程にヒートアップしているらしく、真横までやつてきたリオスに気付く気配は無い。

「ねえ、2人とも」

「そりが……！　しかしその希少価値をもつたりっぱいが、ロリコンを生み出すんだ！」

それを分かるんだよルークッ！！」

「分かつてるよ！　だから、世界にロリコンの心の光を見せなけりやならないんだろ！」

「ねえつてば、ハヤト、ルークも」

言葉だけでは気付いて貰えないと悟り、ハヤトとルークの服を引つ張つたりするリオスだが、それでも2人は気付かない。ここまでくるとわざと無視しているのかと思う程なのだが、実際はただ単にヒートアップしすぎて本氣で気付いていないだけだったりする。

「ちつぱいは！　人間の口全部を飲み込めやしない！」

「おーい」

「ねいぱーの呪わせそんなもんだって、乗り越えられたのーーー。」

「もしもーし

「ならば、今すぐロリコン共すべてに叡智を授けてみせろー。」

ルーキさん、ハヤトさん

お前を置いてから、それがまだらう——」

駄目そうなんだけど

何度も声を掛けても気付かぬ2人に、諦めた表情を浮かべて助けを求めるようにティアナ達を振り返るリオス。しかし、返ってきたのは無常な言葉だけだった。

「頑張れ！」

「頑張りなさい」

「頑張るのじせ」

「酔いよ3人とも……」

「ココ」と満面の笑みで手を振る3人に悪態を吐いてから、もう一度ハヤトとルークの方に向き直る。

どう頑張っても、こうなった2人を止められる筈がないと長年の付き合いで分かっているのだが、ハヤト達を止めるようと言われた手前、無理とわかつてもやらないと後が怖い。

ハヤトとルークだけが馬鹿騒ぎをしていても、何故か最終的には幼馴染の自分まで一緒に説教されてしまつのだから。

「…………よし」

諦めから一転、覚悟を決めたと小さくガツツポーズをして、リオスはもう一度ハヤト達に声をかけようと口を開けようとした……が。

「朝っぱらから何を大声出してるのかしらね、アンタ達は」

「あいだつー?」

「ぎゃふつー?」

それよりも先に、いつの間にか教室の中に入ってきた濃いブラウンのセミロングを揺らす女性が、手に持っていた黒い名簿でハヤトとルークの頭を思い切り引つ叩いた。

「スペーン!」 という小気味良い音とハヤト達の悲鳴が教室に響き、その音の大きさに驚いたリオスは口から出そうとしていた言葉を飲み込んだ。

「「ハ」おおお……」

「いつてええ……」

「全くこれだからあんた達くらいの男は嫌なのよね～。ほらほら、そんなところで痛がってないで、教室の隅っこにでも行つてくれない？ 朝から私のテンション下がっちゃうでしょ」

叩かれたハヤトとルークに冷たい視線を送りつつ、うえーと舌を出す女性。

この女性の名前は左舞^{ひだりまい}。第4訓練校の教官を務める1人であり、ハヤト達の担任でもある女性だ。付き合いやすい人柄で、訓練生からは人気がある。

ただ、ハヤトとルークの2人からの評判だけはすごぶる悪いのであつた。

「おはよウ」ぞこます、左教官」

「はー、おはようリオス。そこの馬鹿2人の面倒、ちゃんとせつてよね。幼馴染なんだし」

「幼馴染だからって面倒を見る必要は……いえ、わかりました」

ひらひらと手を振る舞の主張に反論しようとして、リオスはそのまま諦めたように溜息を吐く。

このあたりは、子供の頃からハヤトとルークの幼馴染として育つ

てきたリオスにしかわからない、一種の諦めといつものだらつか。

「ほり2人とも、いつまでも大げさに痛がってないで席に戻りうよ」

「痛がってんじゃねーよ、ガチでいてーんだよ。手加減しねえとか
どうこう見だ、あの不良教官」

「またたくだぜ。あの教官、馬鹿力で遠慮なくぶん殴りやがって」

「2人ともそんなこと言っちゃダメだよ。教官に聞こえたら怒られ
るよ。」

「残念ながら聞こえちゃってるよ3馬鹿。そんな酷いこと言われる
と、舞さん悲しくって思わずアンタ等の内申を最低値にしちゃうかも
しれないな。そしたら進級はどう頑張つても絶望的かなー。

私としても本意じゃないけど、ショックで思わずだから仕方ない
よねー」

「横暴だ！ 権力の無駄遣いだ！」

「弱みを握つて脅すなんて教官のすることじゃねーぞー。」

「ぼ、僕は関係ないじゃないですか！」

「をほほほほー、お黙りむむ苦しい男子めー、くやしかつたら美少
女に生まれ変わってきなさい！」

そして、アンタ達の進級は私の指先ひとつに掛かっていること
を覚えておくのねー！」

リオスの言葉に跳ね起きるよつに立ち上がり、猛然と舞に向かって抗議するハヤトとルーク。

しかし舞は2人の抗議など知らぬふりで、胸を張つて高笑いを響かせるだけ。本来ならもう少し騒ぎになりそうなものだが、リオスやティアナを始めとした教室にいる訓練生にとって、毎朝のように行われるハヤトとルーク、そして担当教官である舞のこのやり取りは既に恒例行事。

今更あーだこーだと騒ぐのも馬鹿らしこいつものだ。

「ルークがむさ苦しいのは認める！ だが俺はイケメンだろ？！」

「ハヤトがむさ苦しいのは認める！ だが俺はイケメンだろ？！」

「何で2人とも同時に同じ内容の事を、一字一句違わずに言えるの？ 僕はそっちの方に驚きだよ」

「まあどっちも性格が壊滅的だから、どんな顔が良くても意味無いのが悲しいところよね。」

「どのみち私はアンタ達くらいの男は嫌いだから、顔が良くても関係ないけどね。」

「やっぱ弄るなら女の子がいいわよね～。柔らかいし可愛いし……あ、そういう意味じゃリオスは合格だから安心なさい。男にしどくのがもつたいない位に可愛いもの！」

「嬉しくないでーす」

田を爛々と輝かせて、まるで女神のような笑みを浮かべる舞に対

し、リオスは片手を挙げて疲れた声を上げる。とはいってもこの訓練校に入つてから毎日のことだったので、既に諦めが入つているのが涙を誘うところだ。

「差別は駄目でしょ教官！」

「そーだそーだ！ 僕等にはいつでも厳しいくせに、なんでリオスには妙に優しいんだよ！」

「女の子×リオス×××（越えられない壁）×××あんた達」

「すいませんでした……」

「わかればよろしい」

きつぱりと言い放つ舞に、ハヤトとルークが膝から崩れ落ちる。これもまた、このクラスでは余りにも見慣れた光景であった。
うん、まあこれを見慣れるのもどうなんだという気持ちは大いにあるのだけど、見慣れた光景なのだから仕方ない。

「左教官は、あいも変わらず面白い人じやなあ

「アレを面白いと片付けていいわけ？」

「そういう事にしておいた方が、わらわ達の精神衛生にとって健全じやう？」

「まあ……やつや、やつよね」

その光景を見ながら「ヤリと笑ひゆすを横田に、ティアナはやれやれと頷いた。

見ている分には面白いが、あそこには自分から突っ込んでこいつと思えるほど、ティアナは冒険心を持つた若者ではない。むしろ危険から疎遠さかるべきだと考える人間だ。
わざわざトラブルに関わるつと思わなこのは当然だら。

「ま、ござとなつた誰かが止めるでしょ」

「やつじやな。わらわ達は、じいじいじて高みの見物といいつか
や」

ただ、必ずティアナの隣で自分の席に座っているスバルだけは、心配そうな顔をする。

それはお約束となつつある」の後の展開について、彼女なりに心配してくるからだ。

「うーん、本当に止めなくていいの？」

「多分、舞さんとハヤト達、また校長センセに怒りやけつけよ。」

「じゃあアンタが止めにいつてきなさいよ、スバル」

「やつじやな。少なくともわらわは教官に詰まれるのは御免じやも
の」

「う……ん、そりゃあ、あたしだって嫌だなじるわ」

けれども、トーヤアナの声を受け、スバルは口を尖らせて言葉に詰まる。

心配は心配だが、馬鹿騒ぎに絡んだせいで朝から酷に皿にあつのは勘弁願いたいらしい。

正しく懸命な判断だと言えるだろ？

「あの騒ぎはこつものことなんじゅし、放つておるのがよか。わがわ達に出来るのは、じつて騒ぎを眺めながらのんびつしてねべりとなのじゅ」

「あ、そりかなあ」

「当然じゅ。でも、アレはじゅられておるよつのものじゅよ。

左教官がその気になつたなら、ハヤト達なんぞ一発で滅絶をかうれども。何せ格闘戦においては、半よつも遙かに強こんじゅ」

「確かに、それはそりなんだなじゅ」

「心配せんでも、怒られたのも念めっこつも通りとこいつじゅ。そんなにやせもせんでも、この光景を楽しむへりこの余裕を見せ

んとこかんのじゅ」

「……」

「それだ、む？ どうしたかの？」

ぱややんとした微笑を浮かべるゆずだが、自分の方をまじまじと見つめるスバルの視線に、言葉を途中で止めて怪訝な顔で首を傾げ、スバルに向かつてそう問いかけた。

問い合わせられたスバルは「んー」と小さく唸つてから、感心したよつこちく。

「やつぱりゆずって落ち着いてるよね。なんかおばあちゃんみたい」

「おば……っ！？」

「ばつ！ 何言つてんのよ馬鹿スバル！…」

「もがつ」

不穏な発言をしたスバルの口をティアナが慌てて塞ぐ。ただ、スバルはもう『その単語』を口にしてしまった後なので、既に手遅れではあったが。

「お、おばあちゃん……わらわがおばあちゃんじゅと……？」

「いの馬鹿ー、やつ言われるのをゆずが気にして知つてんでしょー？」

「あわわ、そりこえばやつだったー、ビ、ビツコムハティアー？」

「ふ、ふふふ……まだ16年しか生きておらずといつに、まさかおばあちゃん扱いされるとは。

さすがのわらわも吃驚仰天じやよ。まさに青天の霹靂といつヤツ
じや

ゆずは椅子に座つたまま俯き、フルプルと肩を震わせてぶつぶつと呪詛のように何事かを呴いている。

おばあちゃん呼ばわりされたのが、余程ショックだったのだろう。まあ、普通女子なら誰でもおばあちゃん呼ばわれりされればショックだけども。

ただ、ゆずは殊更「おばあちゃん」呼ばわりされるのを嫌がつており、それはこのクラスの人間なら誰でも知っていることなのだ。それはもちろんスバルも知っている……筈なのだが、彼女は時々こつしてそれを忘れ、うつかり彼女をおばあちゃんっぽいと言つてしまつ事があるので。それこそ今回のようだ。

「吃驚仰天とか、そういう回しもおばあちゃんっぽいよね」

「なん……じゃと……!…?」

「だから何でアンタはそういう不穏な発言をするのよ、この天
然馬鹿!」

「ひゃあ!…? し、しまつた! つい口が!…」

注意されたばかりなのに、更にうつかり発言を重ねるスバル。

ティアナに思い切り頭を引っ叩かれるが、もうビリ顔張っても時既に遅し……といつかぶつわざきて遅すぎるといつか、何といつか。

「う、うう……」

「だ、大丈夫よゆず！ ちよっと単語の選び方が古くね……新しくないだけで！」

「そうそう！ 物腰とか喋り方が年寄りくせ……大人っぽいだけだから！」

ふるふると肩を震わせるゆずの瞳、涙が溜まっていく。

ティアナとスバルは何か慰めようとするものの、慌てているせいか結局傷口に粗塗とからしを塗りこむような単語しか選べていな。やめて！ もつゆずのライフはとっくにゼロよ……！

そして

「わらわは……わらわは……つー……まだピチチの16歳じゃもん～～～～～～～！」

「あ、ゆず。ピチチつてこの、もう死語だよ~

「あなたはもう喋るな~！」

「うわ～～～～～～～！」

ガタンッ！ と席を立つて涙目まま教室の外へと駆け出しついでゆす。

その背中にスバルがまたまたうつかり発言を投げかけ、ゆずは走る速度を一気にトップギアに入れ、目にも留まらぬスピードで廊下を駆け抜けていってしまうのだった。

「アーティスト」

「ごめんゆず！ 謝るから戻つてきてーっ！」

ゆずが走り去つた廊下に、ティアナとスバルの声だけが空しく響き渡る。

ティアナとスバルが慌てて廊下に顔を出したが、そこにゆずの姿はもう無かつた。

一方その頃のハヤト達はと言えば。

「さあどうするのかしらー？ 私に内申という切り札を握られてい
る以上、アンタ達に逆転する要素は無いわよ！ さつさと降参して、
私の視界に入らない教室の隅でガタガタ震えてなさい！」

「…………」リリーやアリサヒー。なんだか不思議だな」と、アリサヒー。

「あら？ 諦めたのかしら？」

「いいぜ……教官が俺達の内申を思い通りに出来るつてんな」

「まずはその幻想をぶち殺す！－」

「いや、ハヤトもルークもそんな権限ないよね？」

そげぶごつこで遊んでいました。

この後、舞とハヤト、ルーク、リオスの4人は漏れなく校長から
のありがたいお説教をいただき、ゆずは訓練校を一周してからすっ
きりした顔で戻ってきたとさ。めでたしめでたし。

さて、ここまで読んだ諸君に、は第4陸士訓練校の評判が思わしく
ない理由を理解して頂けたと思う。

優秀な人材を輩出し、教官に歴戦の管理局員を向かえ、レベルの
高い人間が揃っているというのに、第4陸士訓練校が管理局内であ
まり評判がよろしくない理由。

それは

総じて、そこに関わる人間のキャラが濃いせいである。どつ
とはりい。

・今回のおまけ

『ハヤトとリオス』

ハ「……なあ」

リ「何?」

ハ「巨乳の定義って、やっぱ〇カップから
」

リ「いいから反省文書きなよ

『リオスとルーク』

ル「なあ、リオス

リ「何?」

ル「黒縁眼鏡と三つ編みをした真面目つ子がガーターベルト着用つ

て、かなづエロくね?」

リ「だから反省文書きなつて」

『舞とゆす』

舞「ねえ、ゆずちゃん」

ゆ「なんですか、教官?」

舞「私ってね、ポニーテ萌えなんだ。だから

」

ゆ「仕事してくださー」

第1話『朝8時だよー 全員集合!』(後書き)

初めての方は初めて。

私の作品を読んでくださった事がある人は、また読んでくださいありがとうございます。

どうも、ラモンです。

そんなこんなで、いよいよ始まっちゃいました。

今まで他作者さんのキャラを、しかもこんなに大勢動かした経験がないので、凄くドキドキしながら書かせてもらいました。
結構色々やらかしちゃつた気もしますが、大丈夫だったんでしきう

か(汗)

今回登場したキャラクターの作者さん、問題があつたらメッセージなどで教えてくださいませ。修正させていただきますので。

ともあれ、これからもこんな感じで『陸士訓練学校のドタバタな日常』は続いていく……筈です。

果たして私はどこまで頑張れるんでしょうか。

出来る範囲で、全力で頑張っていきたいと思います。

ちなみに『今回のおまけ』ですが、これは今まで登場したキャラクターが4コマみたいな感じで喋りあうものです。

ネタが思い浮かぶ限り毎話やるつもりですので、こちらもお楽しみに。

それではまた、次の話で。

第2話　『彼等は基本的にノリで生きています』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真っ青な座学を教えてい
る。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい
人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた
物語である。

「……」

「……」

早朝、まだ太陽が顔を覗かせたばかりの第4陸士訓練校宿舎。
口の字型になつている宿舎の中庭で、3人の少年が向かい合つて
立つていた。

うち2人はジャージ姿のハヤトとルーク。そしたもう一人は、同
じくジャージ姿の、茶色の髪を肩まで伸ばした、青緑の瞳が印象的
な少年　コウキ＝エレンリッドだ。

「レバサ、どうや?」

「ああ。ルークも準備はいいか？」

「モチのロンよ」

3人はお互の顔を見てから、不敵な笑みを浮かべた。
そして

「まあは腕を上げさせておひまこを賛美する運動からー。」

「さくせーーー！」

「（。。）○三。おひさま二一。おひさま二一。」

3人は腕を思い切り上下させ、宿舎中に響き渡る程の大声で掛け声を上げる。

おっぱいおっぱいと叫ぶ彼等の額には汗が光り、その表情にはやり遂げたかのような表情が浮かんでいる。そして、それを數十分繰り返していただろうか。

一応の終わりを見たようで、彼等は腕を振るのをやめて次の動作を大声で叫ぶ。

「次はー全身を回しておっぱいを崇める運動ー！」

「わざはこーーー。」

「「「〇（ 、 、 ）〇 オハヅコーーー。」」

続いて3人は上半身をぐるぐる回しながら、伸びおひばりおひばり大聲で叫ぶ。

やはりもう宿舎中びしるか、近隣一帯に響き渡るよつた大聲で。現在の時刻は早朝の4時を少しだけ回ったあたり。早朝訓練などがあり、比較的早い起床時間を決められている訓練校でも、極めて早すぎる時間である。

普通に考えればやうらなしにし、仮にやつたとしても、もつらし自重するものだ。

けれど、3人は自重しなこ……ビリの騒がではなく、よつ一層声を張り上げてこく。

「続いてーー上に飛び跳ねておひばり感謝する運動ーーー。」

「「「「おひばりーーー。」」

「せりに反復横跳びをしながら、おひばりへの敬意を示す運動ーーー。」

「ーーー。」

「「「「おひばりーーー。」」

「更に更に、シャドーボクシングをしながら、おひばりの素晴らしさに感動する運動ーーー！！！」

「おーっぱい！」

「ほいでもつて、ニアギターと共におりぱい贊歌を奏でる運動～～」

「おはい」

当然ながら、早朝からそんなに騒がれて平氣な人間など居ない。しかも大半の訓練生は、前日の訓練や座学の疲れなどで朝は一秒でも多く惰眠を貪つていていたいのだ。

תְּבִ�ָה תְּבִ�ָה תְּבִ�ָה תְּבִ�ָה

卷之三

宿舎中の窓という窓から降り注ぐ、魔力弾の雨だつた。

この物語は、第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

誰がなんと言おうとそつなのである。
そ、 そなんだつたら！ やめて！ そんな疑わしい目で見ない
で！！

陸士訓練学校のドタバタな日常

第2話　『彼等は基本的にノリで生きています』

朝の騒ぎから數十分後。

ハヤト、 ルーク、 ユウキの3人は宿舎で最も広い待合所に居た。
だが、 その場に居るのは彼等だけではなく、 他にも数多くの人間
が顔を連ねていたりする。

「じゃあ朝練まで時間も無いし、 とつとつ裁判を始めるぞ。」

被告人ハヤト、 ルーク、 ユウキは前へ

やや跳ねた茶色の髪を持つた少年が、 その鋭い金色の瞳で3人を見据え、 待合所でもつとも大きなソファに座つてそう促す。
どうやらここを簡易的な裁判所に見立てているようだ。
それに伴い、 ザワザワと俄かに辺りが騒がしくなる。

「裁判長は「イツらと同じクラスのクラス委員である俺、氷上京谷が務めさせて貰う。

問題が無ければ始めたいが、何か言う事がある奴はいるか？」

あたりを見回して確認する京谷の間に、周りからの野次馬からは「異議なーし！」「さつさとやれー！」という声が返ってくる。どうやら宿舎にいる殆どの人間が集まっているようだ。
なんだかんだで皆暇人らしい。

「では、今回の事件の経過を私、アウル＝アパレシオンから説明させて頂きます」

そんな中、私服姿の多い野次馬の中から既に訓練生の制服に着替えた少年が歩み出る。

雪のように白いミドルロングの髪を首の後ろで括り、髪色とは真逆の黒い瞳を持つたその少年　　アウルは、どこからか持ってきたファイルを片手に語り出す。

「事件が起きたのはつい先ほど。まだ朝の4時を過ぎたばかりの早晨に起きました。

彼等は……詳しいところは冒頭の部分を読んでくださいね

「おい、メタんな

「失礼。それでは事情を説明させて頂きます。

かくかくしかじか、以上がこの『早朝睡眠妨害事件』の全容になりますね。

我々の睡眠時間はあまりにも突然に、そして無慈悲に奪われました。しかも彼等が奪つたのは、ただの睡眠時間ではありません。

昨日の訓練で疲れ果てた私達にとつて、1分1秒でも長く貪つていたい朝の睡眠を奪つたのです。

これは私が生きてきた中でも、類を見ない程の凶悪な事件ですよ

アウルは目頭を押さえ、沈痛な面持ちで首を横に振る。

そんな彼の言葉にあちこちから「そつだそつだー！」とか「ぶつ殺せー！」という声が上がった。

「待つてくれ！ 僕達に悪意は無かつたんだ！」

「そうだそうだ！ ちょっとおっぱいについての情熱が溢れただけなんだ！」

「おっぱいに罪はない！ つまり僕達にも罪は無い！」

「しかも本人達に反省の色は無い。実に嘆かわしいことです」

頭痛を堪えるような仕草をするアウルに、野次馬達からは同情の声が聞こえてくる。

中々に堂の入った検事役である。本当の法廷でも戦えるのではないか。
いだらうか。

「ハヤト君、ルーク君、コウキ君。もう少し反省したりどうかな？君達が騒ぐのはいつものこととしても、もう少し時間を考えるとか……というかリオス君は？」

「あ、リオスなら昨日胃痛で倒れてまだ帰ってきてないぜ」

「何かマリー・ナ教官の話だと、ストレス性の急性胃潰瘍とかなんとか」

「おいおいハヤトにルーク。お前らどんだけ迷惑かけてんだよー」

「いや、そんなにかけてねーって」

「だよなあ。昨日だって、大したことにしてねーって。ちょっとアイツの部屋にエロ本を隠そうとして、それを左教官に見つかって3人揃って怒られただけだし」

「いつもならば、こいつる前に止めていい筈のリオス＝コーネルドの不在に気付いたアウルが尋ねてみれば、返ってきた答えは予想の斜め上……むしろ空の彼方なものだった。

悪びれもないハヤト達に、アウルは呆気に取られ、京谷は「おいおい」と頭を抱えた。

それ以上に、いくらリオスが女装が似合つ人間だからといって、彼に女装させて心を癒すというのはどうこいつことなのか。虚しそぎるだらう、常識で考えて。

「何だ、いつも通りじゃん

「 「 だろー？」

「 檢察側としましては。彼等に極刑を望みます」

「 「 「 何でつー?」 「 」

反省の欠片もないハヤト達に辟易しつつ、アウルは溜息と共に結論を出した。

もちろんハヤト達がそれに納得する訳もなく、3人は思い切り立ち上がりつて抗議の声を上げる。

「 ただ朝の体操をすることも出来ないなんてー。この国はどうなっているんだ!」

「 そうだ! 僕達には自由に生きる権利があるー。」

「 おっぱーは正義ー!」

「 黙れ」

「 「 「 はー」「 」

しかし、そんな3人の抗議は京谷のひと睨みで搔き消されてしまう。

「 つやつてハヤト達を黙らせる事が出来るあたり、クセの強いハヤト達のクラスを纏めているのは伊達ではないという所だろう。」

「では次に被害者達の声を聞いてみよつじやないか。被害者代表、前へ出でもらえるか」

やれやれと溜息を吐く京谷に促され、2人の少女が前に出る。

1人は薄いブラウンの髪を肩の辺りで揃えた、勝気な印象を受ける少女。

そしてもう1人は、腰まで届く藍色の髪が特徴的な、悪戯好きな猫のような印象の少女だ。

「2人とも、名前を言つてもらえるか?」

「//コト=タツナ//ヒ

「草薙 蒼だ」
くさなぎ そう

「知つてゐる。クラスメイトだからな

「「じゃあ聞くなー」」

ぶつきらぼうに言い放つ京谷に、揃つてツツコトを入れるコト達。

それから一度仕切りなおすように咳払いをしてから、2人はそれぞれ口を開く。

「被害者としてはふざけんなって話よね。」

「つちは昨日、左教官にしごかれたせいで疲れてたつていうの。で、京谷、裁判とかいいから私達に任せない？ 私の電撃で一発よ、こんなの！」

「むしろ被害者全員に一発ずつ殴らせる。私達はその権利を十二分に有している筈だ。」

「何、手間は取らせん。ものの数秒で力がつく」

喋りながらポキポキ指を鳴らす//コトと蒼。

ハヤト達はそれを見て体を震わせながら思い切り後ずさつて悲鳴を上げる。

「ま、まてー 落ち着いて話し合おうーー」

「そうだ！ 僕達には言葉があるじゃないかー！」

「それに本気で悪氣は無かつたんだよー ちょっと徹夜でゲームしてて、テンションおかしくなつて衝動的にああいう事をやつちまつただけで！」

「へえ。じゃあアンタ達は、衝動的に私達の睡眠を妨害したわけね？ どーにもアンタ達、3人揃つてサンズ・リバーを渡つてみたいらしいわねえ……」

「「「はづあーー？」」「

何とか自分達を擁護しようとして、わざわざ地雷を踏み抜く3人。

ここまで見事だと、

もはやワザとやっているんじゃないか、と思つてしまふ程だ。

まあ、実際にはただ単純に必死すぎて自分達が何を言つて居るのか分かつていなかつたのだろうが。

「蒼、やるわよ」

「いいだらう、たまには本氣でいくとしよう」

「……ちゅうとおおおーー。」

ミコトが自分の周りにバチバチと火花を散らし、蒼はそれぞれ拳を固めて田にも留まらぬスピードで、空気を切つてシャドーボクシングを開始する。

どう見ても殺る気マンマンです。本当にありがとうございました。野次馬達もそんな彼女たちに触発され、それぞれが拳を固めているようだ。

「まあ落ち着け。まだ判決は出でていないぞ」

「……うひ」

「命拾いしたな。オマエ達」

しかし彼女達が手を出すよりも先に、京谷が手で制してそれを止

めた。

「被害者達の気持ちは痛いほどよくわかつた。では、今度は被告の弁護人に登場して貰うとしよう。弁護人、入つてくれ」

「どうも、被告人達の弁護人を務めるアルトリニア＝ムーンライトです。

本日はよろしくお願ひしますね」

次に野次馬の中から歩み出たのは、少女と見紛う外見をしたやや小柄な少年、アルトリア。

彼もまたアウルと同じく訓練校の制服に身を包み、長い金色のポニーテールを揺らしながら地面に正座させられたハヤト達の前に出る。

「えっと、ハヤト達は田頃からこいつらの迷惑行為を繰り返してたみたいだよ？」

「こんな風に怒られるのも、1回や2回じゃなかつたみたいだね」

「ふむ」

「ちなみに4日前の朝にも今日と同じ事をして怒られてるね

「つまりは再犯、という事か」

「うん。そういうことになるかな。

けど実際、悪氣 자체はないみたいだし、多少情状酌量の余地はあるかなー。

掛け声の五月蠅とか、叫んでる声の大きさとかはともかく、やつてる」とは一応体操だしね。

その辺りも踏まえて、弁護側としては……」

アルトリアはそこで一度言葉を区切り、それから正座した3人を一度だけチラッと見つめながら、一度咳払いをして結論を述べた。

「特に弁護する価値を見出せませんので、死刑でいいと思いまーす」

「「「おこイイイイー……弁護しりよおおおー……」「

「ぶっちゃけるとね、正直勢いで弁護人役をやったの後悔してるんだ

だ

「「「自分で言い出しておいてー?」「

「安眠妨害は死刑つてこつのが、ウチの家訓なんだよね。
だから死刑でいいと思いまーす」

「「「何で2回言つたしー?」「

可愛らしく首を傾げて、ちゅうりと舌を出しながら叫ぶアルトリア。

もちろん嘘だが、今この場にハヤト達のシッコリ同調する人間は居ない。誰だって、朝っぱらから馬鹿騒ぎをされて安眠妨害をさ

れれば、文句のひとつどころか殺意だって覚えるだろ？。

仮に前日の訓練がなければギリギリ許して貰えたかも知れないが、現実は非情だ。

「よからひ。ではそろそろ朝練の時間も迫ってきたから判決といこう。

検察側、弁護側、そして被害者側。その全員からの証言を纏めた結果……」

「異議あり！ 明らかに俺等が有利になる証言が無かつた！」

「弁護人も弁護してなかつたし！」

「この裁判は違法だ！ 正義が無い！！」

「異議は却下だ。裁判長役にも飽きてきたしな」

「ええへ……」「」

身も蓋も無くハヤト達の抗議を一刀両断する京谷。
まあ実際この裁判（笑）が始まつてから既に30分近く。飽きてきても仕方ないのかも知れない。

「…………うん。やっぱり飽きてきたな。ハヤト、蒼、後は頼んだ」

「りょ～かい」

「いいだろ。任せておけ」

「結果は後で教えてくれ。俺は部屋に戻つて授業の準備をしてくる」

どうやら本氣で飽きていたらしく、京谷はひらひらと手を振つてソファから立ち上がりどこかに行つてしまつ。立ち去る時の彼の指示に従い、ミコトと蒼の2人が裁判長席であるソファに腰掛けた。ただ、いくら大きいとはいへ一人掛けのソファに2人で座るのは、流石に細身の2人でも狭いようでかなりぎゅうぎゅう詰めだつたりする。

「ちよつ、狭いわよ蒼！ アンタちよつと立ちなさい！」

「ふざけるな尻でか女。お前が立つべきだ」

「誰のお尻がデカいですってえー？」

「ふん、お前に決まつていいだろ？」

「余分な贅肉が胸ではなく尻に溜まつているのではないのか？」

「なななな……！？ だ、誰が貧乳よー アンタだつて変わんないでしょ、この貧乳オブ貧乳！」

「よしこ一度胸だ表に出ろド貧乳め」

「席の狭さを発端として、お互の胸を貶しながら怒鳴りあつた」とと蒼の2人。

「ぶつちやけ傍目からはどちらも変わらないのだが、本人達は「自分が大きい」という自覚があるらしい。……どちらもAカップ未満なのにな。

「前々からアンタの態度は気に食わなかつたのよ！

今日こそ、私の方が大きいつて事を、その貧しい胸に教えてあげるわ！」

「おかしな事を言つた超ド貧乳。私の方が大きいに決まつていいだろうが」

「なによ…」

「なんだ？」

被告席に居るハヤト達をそつちのけで、2人はヒートアップしていく。

そのせいでグダグダになつていいく空氣を感じ、野次馬達も1人また1人と立ち去つていつた。

実際のところ、全員そろそろ飽きてきていたのだろう。朝練の近いことも、原因ではあるけれど。

「あー、またグダグダになつちゃいましたね。どうしようか？ アウル

「うーん……仕方ない。私達で判決を下してしまつとしまつうか。ああ、ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん。逃げようなんて思

わないでくださいね？

逃がしませんから

「ぎくつー！」

「許さないよ、絶対にだ」

騒ぎに乘じてこりそり逃げ出そうとしていたハヤト達の首根っこを掴み、アウルとアルトリアの2人がにつこりと笑う。

ハヤト達はこの時、2人の浮かべた朗らかな笑みが、死神の笑みに見えたと後に語った。

アウルとアルトリア。普段は温厚だが、怒ると怖い2人である。

「さて、判決はどうしましょうか」

「そうだな……あ、アウル。丁度いいのがあるよ

「丁度いいもの？」

「あれあれ」

アルトリアの指差す方を見れば、そこには臨戦態勢のミコトと蒼の姿があった。

ミコトは全身に雷を纏い、バチバチと火花を散らす。

対する蒼はゆっくりと腰を落とし、すぐにでも飛びかかるような体勢を取っている。

まさに一触即発。2人の間の空気が、ビリビリと震える程の殺氣

まで感じる程だ。

そんな2人を見て、アウルは「なるほど」と頷く。
どうやら、アルトリアが言わんとしている事に思って至つたりし。

「ハヤトさん、ルークさん、コウキさん」

「時間もそろそろアレだし、判決を言ひつね」

「……」「ごへつ」「」

アウルとアルトリアはゆっくりと3人を振り返り、まず見た者全てを魅了する笑みを浮かべた。

次に彼等は、口を開けて判決を言い放つ。無慈悲に、無感情に。

「//」「トさんと蒼さんの喧嘩を止めてください」

「ただし、2人を怒らせつからね」

「……」「」

「ちなみに従わなかつた場合は、左教官に怒つてもいいからね」

「では、私達はそろそろ授業の用意をしなくてはいけないので、部屋に戻らせて頂きます。」

「頑張つてくださいね」

最後にそう言いながら手を振つて、自分達の部屋に戻つていくる人。

呆然と彼等を見送つてから、3人は恐る恐る言い争つていたミコトと蒼を見た。

「最初からフルパワーでいくわよ。消し炭になつても恨まないでよね」

「そつちこじや、私の一撃で骨が折れないよう気をつけるんだな」

ミコトも蒼も、既に周囲など見えていないらしい。

その表情に浮かぶのは明らかに殺意だ。よほど貧乳を気にしていると見える。

本当なら、3人は逃げ出したかった。

クラスメイトなのだから、ああなつた2人が危険すぎるのを百も承知している。

しかもアルトリアの指示は、更にあそこから怒らせた挙句に喧嘩を止めなければいけない。そんな事が不可能だということは明白すぎる事。

けれど、2人を止めなければ、彼等にとつて天敵とも言える左舞教官がやってくるのだ。

いくら嫌でもやらなければならない……世の中、こんな筈じゃなかつた事ばっかりだよ。

「怒らせる役は俺がやる。お前達は逃げる準備だけをしておけ」

「へつ……馬鹿野郎。ハヤト1人にいいカツコをせるかよー。」

「そりだぜ、旅は道連れ世は情け。俺たちも一緒にやるぜー。」

「お前ら……全く、幼馴染のルークはともかく、ユウキも大概だな」

「「まつまつはー！」」

悲壯な決意を固めながら、お互いの肩を叩いてひとしきり笑いう。

そして3人は顔を見合させてひとつ頷くと、大きく息を吸つてそれぞれに叫んだ。

「//マトのビひんにゅーーー！」

「蒼の胸はえぐれ胸ーー！」

「お前ら揃つて豊胸パッドでも使つてなーーー！」

「「なああんだとあおおおーーーー？」」

「「「ひこつーー？」」」

ハヤト達の子供じみた中傷に、マトと蒼は修羅の如き表情で振り返る。

その顔を見た瞬間、ハヤト達は反射的に駆け出していた。

振り返つたら、足を止めたら、その瞬間に狩り取られる。

人としての……いや、生物としての本能がそう叫んでいるからだ。けれど、悲しいかな。追う側と追われる側で、今回はあまりにも差がありました。

魔導師としての道はない。

生物としての性能でもない。

“生き延びたい”という想いと、“狩る”という絶対の意思。そこで、どうしようも無い程の差があったのだ。

「ち、ちがひ、詰して……。」

「ふぬふぬ……やめて！ ボク悪いルークじゃないよ。」

「こんなのは絶対おかしい……せめて最後まで話わせてください……」

「「知つたことかああああああああああああああ！」！」

彼等が逃げ出してから数秒後。

宿舎に、狩られた者達の悲鳴が響き渡つた。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真っ青な座学を教えてい
る。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい
人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた
物語である。

…… そうだと、いいな。

・ 今回のおまけ

『京谷とゴウキ』

ゴ「なあ、京谷」

京「ん？ なんだ？」

ユ「俺が頭良くなつたら王手ると思つか?」

京「不可能な夢を見るな」

『アルトリニアとミコト』

ミ「ねえ、アリア」

ア「どしたの、ミコト?」

ミ「何をしたら、胸つて大きくなるかな?」

ア「何で俺に聞くの? 僕男だよ?」

『蒼とアウル』

蒼「アウル、少しいいか?」

アウ「何でしよう?」

蒼「さつき雑誌で、男と（自主規制）をすると胸が大きくなると書いてあつた。

だから手伝え。今すぐにだ」

アウ「全力でお断りします」

第2話『彼等は基本的にノリで生きています』（後書き）

キャラ崩壊つてレベルじゃねーぞ！
どうも、ラモンです。

だ、大丈夫かな今回……大分キャラ崩壊しちゃってる人たちが居る
ような……怒られたら即行で直そう。
そんな感じの第2話でした。

やつぱり人が多いと難しいですね。
しかもまだ紹介していないキャラクターを登場させてるので、紹
介とあわせると中々どうして難しい……。
今回は京谷さん、アルトリア君、アウルさんあたりが酷いキャラ崩
壊をしちゃってる気もしますし。
ノリで書いていると、こいついう時に困りますね。

ちなみに、クラスメイト枠の皆さん……特に男子は結構な勢いで3
馬鹿枠みたいな動きをしてもらつ場合があります。
基本的に3馬鹿は固定ですが、今回みたいに誰かが3馬鹿枠に巻き
込まれる場合もございますのでご注意ください。大概酷い目にあい
ます。

とりあえず今回で3馬鹿、クラスメイト枠の皆さんは殆ど出演させ
る事が出来ました。

次回からは上級生枠、生徒会枠、クラス委員（女）枠、女子クラス
メイト枠の最後の1人、そして教員枠の皆さんをメインに据えてい
きたいと思っています。

どうなるか分かりませんが、頑張りますので怒らないで見てください
ませ。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第3話『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真っ青な座学を教えてい
る。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい
人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた
物語である。

陸士訓練校は、当たり前ながら陸戦魔導師を始めとした数々の魔
導師を教育する機関だ。

しかしその反面、普通の学校としての側面も持つていて。

その最たる例として挙げられるのは、生徒会がある事だろう。

生徒会のメンバーは、役職ごとに立候補した中から選挙で選ばれ
る。

とはいっても、生徒会と言えば「面倒」と押し付けられる」という
イメージを持つ人間が多いため、実際は立候補すれば間違いないく当
選という状況ではあるのだが。

そんな現状もあって、生徒会のメンバーは現在僅か4名。しかもその全員が、中々に濃い面子になってしまっているのだ。

「ねえ、ハヤブサ」

「あん？」

その生徒会のメンバーである2人の少年、リョウガ＝ヤマトとハヤブサ＝ヴェヌーシアは、それぞれ自分用に宛がわれた机の前でパソコンに向かっていた。

「さつきから仕事が全然進んでないみたいだけど、何やつてるの？」

青緑色の目でパソコンの向こうから反対側の席に座る人間を睨みつけるのは、リョウガ＝ヤマト。

若干10歳でありながら、飛び級でこの訓練校の最上級生として通い、生徒会では会計を任せられている天才児だ。可愛らしい顔つきもあって、特に女子の訓練生からの評判がよく、この第4訓練校ではそこそこの有名人だったりする。

「あー？ ゲームやってる」

そんなリョウガの鋭い視線を受けつつ、平然とパソコンの画面を見つめているのがハヤブサ＝ヴェヌーシア。赤いウニのような髪形

が特徴的な17歳男子。

ハヤト達の上級生に当たる訓練生で、一応生徒会の書記を担当している。

「ねえハヤブサ。僕は必死になつて君の倍以上はある書類をやつてるのに、まさか君はこともあらうに生徒会室でエロゲをやつてるの？ 何なの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「はあ？ いい加減リトバスをエロゲと勘違いしてん奴うぜえ。

エロゲじゃないし。TO LOVEるとかの方がよっぽどエロゲ

「エロゲじやなかつたら何なのさ」

「筋肉……かな？」

「うわあ……」

パソコンの画面から窓の外へと視線を移し、遠い目でそう呟くハヤブサに、リョウウガは本氣でドン引きした。まあ、実際リョウガでなかつたとしてもドン引きしちゃうが。

ちなみにFateは文学、Aireは芸術、クラナドは人生だ。

「つて、そんな恒例のやり取りは置いといて。仕事は終わつたの？ 何か見た限りだと、全然進んでないよつたに見えるんだけど」

「は？ 仕事とか超面倒くせえし。そんな事より野球しようぜ！ 俺達のチーム名は『ハヤブサバスターズ』な

「仕事しないならへし折るよ?」

「ビーをー? つーか何で俺の股間をガン見なんでせうかー? ち
よつ、やめてえつー!」

不穏な箇所を見ながら手をボキボキと鳴らされ、ハヤブサは慌てて自分の股間を押さえ、椅子ごと飛び上がって後ろに下がる。男の勲章をへし折られたらフラグも立てられないからネ!

「はあ……別に仕事しないならそれでもいいけどな。怒られるの僕
じゃないし

「えー。もう少し構つてくれよリョウガ、俺達友達だろ?」

「10歳の子供に構つてくれって頼む17歳つてどいつなの?」

「まけえたあいいんだよー!」

「細かくないじゃん」

ハヤブサの言葉に、リョウガは呆れた声で返しながら再び手を動かし始めた。

実際に手馴れた対応である。まあ、なんだかんだと殆ど毎日ハヤブサの相手をしているのだから、嫌でもリョウガにも耐性がつくというモノだろう。

本人に聞いたら、「こんな耐性欲しくないんだけど」と言つのは

田に見えているが。

「うと、やつこや今日会長と副会長は？」

そこでふと気付いたとばかりに、ハヤブサが尋ねる。

ハヤブサの問いに対し、リョウガは今田何度田になるか分から
ない溜息を、これ見よがしに深々と吐いてみせてから渋々という感
じで答えを返す。

「はああああ…………会長と副会長は、学内の治安維持のために見
回り中だよ。

昨日ひとさん言われたじゃない。聞いて……無かつたんだうつけ
ども、ハヤブサは」

「ふつ、そんなに誉めないでくれたまへ。照れるじゃないか」

「誉めてない。まったく微塵も欠片も小指の先ほどすり誉めてない
から」

「またまたへ、リョウガちやんてば照・れ・屋・や・ん」

ウザいスマイルを浮かべ、反対側の席まで手を伸ばしてリョウガ
の額を軽くつつつくハヤブサ。

……それは、見るもの全てがイラッとする程、見事なモノ
であったと言つ。

もちろん、それにイラッとしたのはリョウガも例外では無く。

「ねえ、ハヤブサ？」

「はいはい、なんでせうか？」

「全力攻撃と、全身全霊攻撃、どっちがいい？」

「……それ、どういう違いがあるんだ？ 説明願いたい」

「簡単に言つと、Die or Death」

「どっちも死んでるじゃん！？」

「大正解。じゃあ……死のうか？」

後光が差してきそうな神々しい笑みを浮かべてリョウガがそう言った次の瞬間、生徒会室から灰色の光が溢れ、次いで凄まじい爆発音が轟いた。

第4陸士訓練校。
ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真っ青な座学を教えてい
る。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……の筈である。

多分、きっと、おそらく。

陸士訓練学校のドタバタな日常

第3話　『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』

「『めんねー、美卯。私の用事に付き合わせちやつて』

「いいよ別に。友達が困つてたら、手伝つてあげたいもの」

リョウガとハヤブサの2人が生徒会室で生死を賭けた戦いを繰り広げている頃。

訓練校から宿舎へと続く道を、2名の少女が歩いていた。

「こじし、優しいにゃー。だから美卯つてば大好きー。」

そう言って嬉しそうに笑うのは、背中まである深緑色のポーテールを揺らす活発そうな少女、ソフィア＝ジュリーストン。ハヤト達のクラスメイトであり、クラス委員でもある女の子だ。

ちなみに、低めの身長には不釣合いな、たわわなおっぱいの持ち主でもある。

「え？ そういう情報いらぬ？ またまた、遠慮しないでいいつてば。

「もー、ソフィアはすぐやつやつて誤魔化すんだから」

ソフィアの人懐っこい笑みに苦笑して、彼女の額を軽く小突くのは山城美卯。

彼女よりも短く、肩よりも少し上までしかないこげ茶色のポーテールが特徴的な女の子で、ハヤト達のクラスメイトでもある。

「そういうえば、ソフィアは今日この後どうするの？」

「んー？ 宿舎に帰つて、スバルとゆずの3人でゲーム大会でも、つて感じかな？」

「またそんな不健康な……」

「だつてー、あと数日後にはクラスのゲーマー全員対抗モンハン大會があるんだもん。

今のうちから頑張つて、いい装備整えておかないとな！」

「ああ、そういうばそんのあつたね。

あれって結局誰が主催して……って、そんなのハヤトしかいないよね」

「「ううん？ 左教官だよ？」

「〇〇・・・

衝撃の真実に思わず言葉を失う美卵であつた。

まさか、ゲーム大会を自分達の担当教官が主催しているとは夢にも思つまい。

むしろ十分に予想していたからこそその反応かも知れないが。

「今のところ、ハヤトとルーク、リオスの幼馴染組が優勝候補なんだよね。

だから、私もスバルとゆずの2人と力を合わせて、あの3人をぎやふんと言わせてやるのさ！」

ふははははー！

「……なんかそれ、先月も聞いた気がする」

「……だつてあの3人強すぎなんだもん」

冷静にツッコまれ、ソフィアはしょぼーんと肩を落とす。

実はこの【クラスのゲーム全員対抗モンハン大会】は毎月行われており、今のところハヤト・ルーク・リオスの幼馴染チームが3連覇中である。

「でも、ソフィアは先月ので2位だったじゃない？　1位じゃないと駄目なの？」

「そりやそうだよ。だって、1位になつたら左教官からジユース奢つてもらえるし」

「うわ、何とも即物的な……」

嬉しそうに顔を上げるソフィアだったが、美卯は彼女が話す内容を聞いてまた溜息を吐いた。

ちなみにこの1位の景品、ハヤトとルークは一度も奢つてもらつた事が無かつたりする。

舞曰く、「可愛くない奴に奢るお金は無い！」との事だ。それでも優勝してしまうあたり、ハヤトとルークは意外とMなのかも知れない。いや、単純にゲーム好きなのだろうが。

「先月はあとちよつとまで行つたからねー。今回これは絶対に勝つよー！」

「無理だと思つけどなあ。リオス君はともかく、ハヤトとルークの2人は、成績……というか生活全般を犠牲にゲームをやつてゐるところあるし」

「ふふふ、だから私達も今回は成績を犠牲にする覚悟なんだよー！」

「いや、駄目でしょ」

自信たっぷりな顔で胸を張るソフィアにツッコミをいれ、美卵が苦笑する。

まあ本当に成績を犠牲に……とは美卵も思っていない。なにせハヤトとルークがどのくらい成績を犠牲にしているのかといえば、それこそ座学の最中でさえゲームをやるくらいだ。

ソフィアは根が眞面目だから、そこまで馬鹿な事は出来ないと知っているのだろう。

「それじゃあ早く帰ろつか。ゆずやスバルも待ってるみたいだし」「だね～。一杯練習して、今度こそハヤト達をぎゃふんって言わせるんだ～」

「はいはい、頑張つてね」

そんな風に楽しそうに言葉を交わしながら歩いていた2人だったが、ふと自分達の視界の端に妙なモノを見つけて足を止めた。

「……」

「……」

2人の視線の先 校舎から宿舎へと続く道の脇に植えられている街路樹の側には、コソコソと隠れてあたりの様子を伺っている1人の少年……ハヤブサが居た。

「どうやら生徒会室でリョウウガから攻撃された後、何とかここまで逃げ延びていたらしい。

それを見つけた美卵は、暫く彼の様子を眺めてから胸のポケットから携帯端末を取り出し

「あ、警察ですか？　ええ、不審者です。第4陸士訓練学校の側の」

おもむろに警察に電話した。

「ちよーっと待つた—————っ！」

「おっとーーー？　ここでハヤブサ先輩のちよーっと待つたホールだーーー！」

「なんでナチュラルに警察に連絡しようとしてるんでしょうか！？
酷くない！？」

「ハヤブサ先輩、この自分の今の姿を見てから言ひてください」

「いやそれを言わると何も言い返せませんがー！」

通報しようとした美卵に抗議するものの、どうやらハヤブサ自身も自分の格好が、どこからどう見ても不審者だといつ自覚はあったらしい。

「まあ大丈夫ですよ。本当に通報してる訳じゃないですから」

「え、そうなの？」

「やうですよ。ハヤブサ先輩がそりやつてコソコソしてるので、結構日常茶飯事ですし」

「私達……といふか、訓練校の皆が見慣れてるしね～」

「否定しきれないのが悔しい」

がつくつと肩を落として落ち込むハヤブサだが、決して自分の素行を改めようと思わないらしい。

そのあたりが彼の悪い点でもあるが、だからこそハヤブサは上級生でありながらハヤトと仲が非常に良かつたりもする。まあ、単純にハヤトが素行不良でよく生徒会室に呼び出されているのも一因だけれど。

ともあれ、ソフィアと美卵はきやこきやい楽しそうにハヤブサを弄る。

「ていうか今日まだちかひ……ああ、隠れてるって事はヤマト君からですね」

「だね～。みつちー先輩からなら、こんなところで隠れてないで、もつと遠くまで逃げてるだろ?」

「俺の行動見破られすぎワロタ」

「それだけハヤブサ先輩が追つかれてるって事ですよ」

やれやれと溜息を吐きながら、美卯が肩を竦めた。実際ハヤブサがこうして逃げ回るのは殆ど毎日で、ある種の恒例行事として訓練校中で有名なのだ。

もちろん“殆ど”毎日なのであって、本当に毎日な訳ではない。せいぜい2日に1回くらいの……あれ？ これもう毎日でよくね？

「まあそれは置いといて」

氣を取り直したハヤブサが一寸話題を切り、次の話題につなげようとしたその時。

「待て、待て！」

「…………？」

突如、凜とした声が辺りに響く。

その声に男達が慌ててあたりを見回せば、ソフィア達から少し離れた場所にある丘の上に、1人の少年が腕を組んで立っているのが見えた。しかし彼の顔だけは、不自然な逆光で見ることが出来ない。

「悪しき星が天に満ちる時、大いなる流れ星が現れ……。

その真実の光の前に、悪しき星は光を失い、やがて墮ちる……。

人、それを「裁き」とこう………

逆光に照らされたまま、少年はすらすらと口上を述べる。
そんな少年の口上に、ハヤブサが怯えの混じった怒鳴り声で問い合わせた。

「誰だアンタはっ！？」

だが、その問い合わせに対する少年の答えは短く、明瞭なもの。

「貴様に名乗る名前はないっ！！」

言ひが早いが、少年は高々とジャンプして空中に綺麗な放物線を描き、ハヤブサの後ろに着地する。

すると、逆光で見えていなかつた少年の顔がソフィア達からようやく見えるようになり、その顔を見たソフィアと美卯は「あれ？」と声を揃えて少年の名を呼んだ。

「御剣副会長じゃないですか」

「みつちー副会長だ、やつほー」

「……つ、おいで前達。」うつ場面で名前をバラすな、お約束は守るべからざり。

それからみつちーと呼ぶなと何度も言つたら……

折角の登場シーンを邪魔され、不満そうに頭を振る少年の名は御剣仁。

この訓練校の生徒会副会長であり、訓練校内でもう一本の指に入る実力者として有名な少年だ。

「じほんつ。まあ、それは今は置いておくぞ。それよりもハヤブサ、逃げるな」

「えへへー。」

咳払いと共に一度話題に区切りをつけ、それから御剣はかける銀縁の眼鏡を軽く上げながら、背中の半ばまである黒髪をかき上げ、じつそりとこの場から立ち去りはじめていたハヤブサを睨みつけた。

睨まれたハヤブサはギギギと音が鳴りそうな程にゆっくり振り向き、冷や汗をダラダラ流しながら愛想笑いを浮かべるのだった。

「い、嫌だなあ別に逃げないですよ？ これはちょっと前衛的な運動でして……」

「言い訳はいい。まつたく、お前は何故わざわざリョウガを煽るんだ。

お前のせいで書類が散乱して面倒なことになつていいんだぞ。破けてたり燃えていない分マシとはいえ後片付けがどれだけ面倒だと思つていい

「

「いやあ、リョウガの反応が面白くひついつい」

「ついで毎回書類をあらされてたまるか。それの後始末に私と朔也がどれだけ苦労しているか。

くそつ、また胃薬を追加注文せねば……」

「みつちー副会長大変ですね～」

「胃薬の量が増えたつて聞きましたけど、大丈夫ですか？」

深い溜息を吐く御剣と、そんな彼の肩をたたいてのほほんと笑うソフィア。

美卯は心配そうな顔で彼の顔を覗きこみ、ハヤブサは「てへぺろ」と可愛らしく舌を出していた。男のてへぺろは死罪に値すると思つんだがどうだろ？

などという戯言はともかく。

胃の痛みに御剣が顔をしかめてくると、彼がさつきまで立つていた丘の影から、大き目の照明用ライトを抱えたやや短めの黒髪をもつた少年が、少しばかり覚束ない足取りで歩み出る。

「み、御剣君！　これ重いから手伝つて欲しいんですけど……」

「な！？　朔也！　それはそこに置いておけと言つただろ？！？」

「いえ、ですが」のまま机に置いておくと、帰るとせんに私が忘れそうだったので

「私が覚えておくし、運ぶのも私がやると言つただろうが…？」

恥ずかしそうな表情を、そのやや大人びた顔に浮かべて現れたのは、この第4訓練校の生徒会長を務める月城^{つきじゅう} 朔也^{さくや}。怒る事が殆ど無く、誰にでも分け隔てなく接する彼は、一部では「仮の月城」と呼ばれている。

「ですが、御剣君の登場を演出するために借りてきたものですし、早めに返さないと……」「…

「だから返却は後で私がちゃんと自分でやると……ああもう、そんなフランフランしてまで抱えるな！」

落としたら弁償になるだらつー？ ととりあえずセレクトさせ

…くう、また胃がキリキリと

「す、すいません。それじゃあ……ひとつ。いや、重いですねこのライト

持っていた大型ライトを地面におこしから、朔也はもう一度照れくさうに笑う。

そんな彼の声に頭を抱えて胃の辺りを押さえた御剣に苦笑しつつ、美卯は地面に置かれたライトと朔也の顔とを見比べ、首を傾げてみせた。

「月城先輩。そのライト、どうしたんですか？」

「ああ、御剣君が演出に使ったかったみたいで、ちょっと教官室から借りてきたんですよ」

「御剣先輩が……なるほど、さつきの不自然な逆光はコレが原因でしたか」

彼の説明に納得がいったのか、美卯はライトの方を見ながらしきりに頷く。

「わは～　みつちー副会長は相変わらず手を抜きませんね～」

「当然だ。やる以上は何事も徹底的にやる、それが生徒会役員の血の綻だからな」

「いやいやいや！　俺そんな物騒な捉聞いてませんけど…？」

「言つていなからな」

あいつさうと言ひきる御剣に、ハヤブサは右手で顔を覆つて天を仰ぐ。

そしてハヤブサは天を仰いだまま、御剣に向かつて問いかける。

「もし破つたらどうなるんせつか？」

「なに、ちょっとしたペナルティがあるだけだ。具体的には他の生徒会役員に一週間学食を奢る、程度のものだな。軽いものだな」

「わーお、流石この事実にはヴェヌーシアさんも驚きを隠せませんの」とよ。

「気にあるな。お前は良くも悪くも徹底的にやる人間だからな、問題ない」

「マジで!?

「マジで。そしてそれで思い出したが、そろそろ生徒会室に戻るぞ

言しながら、御剣がハヤブサの制服の襟首を掴む。

そこでようやく「しまった!」と自分が逃亡中だったのを思い出したハヤブサだったが、捕獲されてしまった以上逃げる手立ては無い。

「ちひりー。話に夢中にさせてから捕獲しこへるとか……汚いな

！ わすが副会長汚い！…」

「誰が黄金の鉄の塊か」

「まあまあ、ヴェヌーシア君もそんなに抵抗しないでください。ヤマト君がいつも通りかなり怒りますから、先に生徒会室に戻って仕事をしていましょう。

そうすれば、ヤマト君も見逃してくれる可能性はあるでしょう？」

「む……絶対にありえない筈なのに、会長に言わると何故かあります
そつだと思つてしまつ不思議」

「それじゃあ、帰つて仕事を片付けてしまこましょつ」

言葉一いつ穂やかだが、そう言つた後の朔也と御剣の行動は早かつた。

あつとこゝろ間に御剣と共に彼の両腕を掴んでハヤブサを引きずつていけるよつな体勢になると、2人は揃つて事の成り行きを見守つていたソフィアを美卵のほうを見る。

そして、2人とも微笑を浮かべてソフィア達に挨拶をした。

「それでは山城さん、ジュリーストンさん、氣をつけて帰つてくださいね」

「宿舎までの距離は近いが、この時期は変質者も出るといつ話も聞く。十分に注意しろ」

「はーい。つきー先輩もみつちー先輩も、頑張つてくださいね~」

「月城先輩、御剣先輩、頑張つてください」

御剣達の挨拶に笑顔で手を振り、ソフィアと美卵は宿舎に向けて歩き出す。

少女達の背中が見えなくなつたところで、朔也と御剣は、ハヤブサを引きずりながら生徒会室に向けてゆっくりと歩き出した。

「おへしゃべ、今日ハジマセリヤの内に逃げらる」と語ったの」「逃げよつとあるな。まつたぐ、お前はやれば出来るの向故仕事をしないのか……」

「セリヒゲームがあるから、ですかね」（じやあ……）

「…………朔也。今度生徒会の予算で畠薙を買つてくれ、ダースで「検討しておきます。ヴェヌーシア君も、あまり御剣筋に苦労をかけないよつにしてくださいね？」

「前向きに検討したいと秘書が申しておりました」

頭を抱える御剣と、困ったなあと苦笑する朔也。

第4陸士訓練校で名物となつてゐる、そんなやり取りの一幕であつた。

「あ、ハヤブサ見つけた」

「あ、ヴェヌーシアさん見つかっちゃつた」

「見敵必殺」

「わーお、殺意ビンビンすぎて泣きそー」

「………… 朔也。5ダースに増やしておいてくれ」

「了解しました」

この後、訓練校の敷地内でガチバトルを繰り広げるハヤブサとリヨウガ、そしてそれを全力で止める御剣と朔也の姿があつたという。そしてこのガチバトルは、最終的に高町なのは教官が割つて入るまで続いたらしい。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真っ青な座学を教えてい

る。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語になる予定だったナニカだ。

・今日のおまけ

『ハヤブサと御剣』

ハ「副会長、俺思つんですけど」

御「何だ?」

ハ「リトバスは人生。そして俺の人生の主役は俺。つまり、リトバスは俺と言つても過言じゃ無いんじゃ

御「消し飛ばすぞ」

『リョウガと朔也』

朔「ねえ、ヤマト君?」

リ「どうしたの、朔也さん?」

朔「高町教官の砲撃つて凄いですよね」

リ「思い出させないで」

『ソフィアと美卯』

美「じー……」

ソ「？ どしたの、美卯」（どたぶーん）

美「……」（ぼよん）

ソ「変な美卯～」

美「大丈夫、まだ成長期。これからこれから……」

第3話『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』（後書き）

正直に言おひ。ロム兄さんがやりたかっただけだ。
どいつも、ラモンです。

そんなこんなで第3話。

今回は生徒会メンバー全員と、出せていなかつたハヤト達のクラスメートの女子2人に出演していただきました。
御剣さんを大分はつちやけさせたが、大丈夫だらうか？
怒られたら即行で書き直そう……（汗）

応募して頂いた作者の皆さん、何か自分のキャラで「不満な点など」とありましたら、メッセージなどで教えてください。
場合によっては最初から書き直しとかしますので。

それと、ここでちょっとお知らせ。

今回で3馬鹿枠、クラスメート枠、クラス委員枠、生徒会枠での出演メンバーは全員登場させることができました。
なので、ここから辺でこの枠のメンバー紹介を載せようと思ひます。
名前、年齢、髪型、外見、性格の5項目を載せたいと考えています。
さて、次回は残つてゐる上級生枠、教員枠の皆さんに出演していただきたいところですが……教官枠全員登場はちょっと難しいかもですねえ。

流石に、教官が一気に登場となると、職員室の話になつちやいそうですし。

あ、ちなみに教官としてなのはも出できますので、そのあたりもよければお楽しみに。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第3話までの登場キャラクター紹介（前書き）

今回は

- ・【3馬鹿枠】
- ・【クラスメイト枠】
- ・【クラス委員枠】
- ・【生徒会枠】

以上の4枠のキャラクターを紹介します。

第3話までの登場キャラクター紹介

・【3馬鹿枠】

【男子】

1.

名前：ハヤト＝ロックウェル

年齢：16

髪型：ボサボサの短い金髪

外見：目は縁っぽい青。ややツリ目がち

性格：楽天家。巨乳マニア。そしてエロい

備考：3馬鹿の馬鹿担当。御剣の胃薬摂取量を増やす原因その1。

成績は下の中

2.

名前：ルーク＝リーゼンベルグ

【F20Cさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers Lost Memory他】

年齢：16

髪型：金髪の天然バーマ。長すぎず短すぎず

外見：紅色の瞳。身長は3馬鹿で一番高い

性格：エロ魔人。気さくな性格。だがエロい

備考：3馬鹿のエロ担当。御剣の胃薬摂取量を増やす原因その2。

成績は中の下～上の下とムラがある

- 3 .
 - 名前：リオス＝「一ネルド
 - 【神崎はやてさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers
～氷翼の天使～ 他】
 - 年齢：16
 - 髪型：プラチナブロンドの短髪
 - 外見：女の子と見紛うくらいに可愛い。金色の丸っぽい目。
 - 身長は3馬鹿で一番低い。
 - 性格：優しく誠実。苦労人
 - 備考：3馬鹿の理性担当。最近胃薬を飲むようになった。成績は上の中
- ・【クラスメイト枠】
 - 【男子】
 - 4 .
 - 名前：アルトリア＝「ムーンライト
 - 【キャビア伯爵さん著：魔法少女リリカルなのは 新約・純白の騎士姫】
 - 年齢：15
 - 髪型：金髪のボーテール。長さは首の辺りまで
 - 外見：リオスに負けず劣らず可愛い。緑色のたれ目

性格：そうそう怒らないが、涙もろい。そして総受け

備考：男の娘担当。弄る側、弄られる側どちらもこなす器用な少年。

成績はかなり良い

5.

名前：アウル＝アパレシオン

【EXAMさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～亡靈の弾丸～】

年齢：16

髪型：白色のミドルロング。首の辺りでひとつに纏めている

外見：黒く中性的な瞳。身長はルークと同じくらい。イケメン

性格：大人っぽく、面倒見が良い

備考：クラスのお兄さん担当で良心担当。成績はトップ10以内

6.

名前：ユウキ＝エレンリッド

【結城光さん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～運命を背負いし者～】

年齢：16

髪型：茶髪で肩まで伸ばしている

外見：青緑色の瞳、身長はハヤトと同程度

性格：底抜けに明るいムードメーカー。しかしエロい

備考：クラスのムードメーカー。ハヤトやルークと一緒によく馬鹿をやっている。

御剣の胃薬摂取量を増やす原因その3。成績は中くらい

【女子】

7 .

名前・高町ゆず

【あーちゃん後輩さん著・WISH 壬女が願う夢】

年齢・16

髪型・黒のセミロング。肩のあたりまで

外見・切れ長な右がオレンジ、左が紫のオッドアイ。身長は低め。胸は大

性格・のんびり屋で落ち着いている。悪く言つとお嬢ちやんっぽい

備考・お婆ちゃん扱いされるとイジける。基本はツッコミ担当。成績は中～上

8 .

名前・草薙
蒼くわなね
そつ

【Kの2乗さん著・魔法少女リリカルなのはStrikers～紅闇の少年と機人の少女～】

年齢・15

髪型・藍色（濃いめの青）の、腰まで届くストレート

外見・水色の細い瞳。身長はゆずと同じ位。胸は貧

性格・人をからかうのが好き。ブラコン

備考・主に意地悪担当。胸の事をからかわれるとキレて凄いこと。成績は中

9 .

名前：山城 美卯

【検体番号10032さん著・告白 -アフターストーリー-

年齢：16

髪型：こげ茶色の肩まで届くボニー テール

外見：明るい茶色のたれ目。身長はゆず、蒼と同じ程度。胸は小

性格：基本は面倒臭がりだが、根は真面目

備考：主にツツコミ担当。面倒見が良く、よく友人に相談を受ける。
成績は中くらい

10.

名前：ミコト＝タツナミ

【ムーギネーターさん著：【習作】魔法少女リリカルなのはStar
ikeru ~禁断の刃~】

年齢：15

髪型：肩にかかる程度のショートカット。茶髪

外見：やや釣り目がちの黒い瞳。身長はやや高め。胸は小

性格：負けず嫌い。シンデレ

備考：主にツツコミ、シンデレ担当。胸の大きさだからかわれると
キレる。成績は良い

・【クラス委員枠】

【男子】

11.

名前：氷上京谷
ひかみ きょううや

【Kyoさん著：魔法少女リリカルなのはStrikerS 最強の魔導師は転生者～】

年齢：16

髪型：茶色の短髪

外見：大きめの金色の瞳。身長はハヤトと同じ程度

性格：面倒見が良く、ツツノミ氣質

備考：苦労人。主にハヤトとルークのせいで気苦労が絶えない。成績はトップクラス

【女子】

12.

名前：ソフィア＝ジュリーストン

【神崎はやてさん著：新魔法戦記リリカルAngels ~The Rule of Gods~】

年齢：14

髪型：深緑色のポニー テール

外見：オレンジ色の瞳で垂れ目。身長はクラスで一番低い。胸は巨

性格：天真爛漫で無邪氣

備考：クラスの癒し担当。クラス最年少で、皆から可愛がられている。成績は中の上

【生徒会幹】

【男子】

13.

名前：月城 朔也
つきしろ さくや

【雨凪 雪人さん著・魔法少女リリカルなのはStrikers～とある年増の銃騎士～】

年齢：19

髪型：黒のミニディアム、首の辺りくらいまで

外見：黒い瞳で垂れ目がち。身長はやや高めでイケメン

性格：温厚で年下に甘い。やや天然気味

備考：生徒会長。仕事も出来て訓練生に絶大な人気を誇る……が、時々天然ボケな行動をしてしまう時も

14.

名前：御剣 仁
みつるぎ ひとし

【HagalaNさん著・とある最強系主人公達の放蕩記】

年齢：19

髪型：黒色で、肩甲骨あたりまでのロングヘア

外見：ツリ目な黒の瞳。銀縁の眼鏡をかけている。身長は高くイケメン

性格：悪に義憤し善を嗤うタイプ。保護者属性。ツツ「ミ
備考：生徒会副会長。仕事も出来るし人気もあるが、もの凄い苦労人で最近は胃薬がお友達。

生徒会の中では一番苦労している人。

名前：リョウガ＝ヤマト

【十五郎さん著：魔王少年リリカルりょうが 他】

年齢：10

髪型：黒のショートで、前髪を分けて目に入らないようにしている
外見：垂れ目氣味の青緑色の瞳。身長は年相応に低く、ゆず達よりも低い

性格：優等生を演じているが、腹黒。むつりだつたりもする

備考：生徒会会計。飛び級で訓練校最上級生になつた天才。基本的にいい子だが、実は腹黒。

彼の本性を知つているのは極一握りの人間だけ。

16.

名前：ハヤブサ＝ヴェヌーシア

【タケケさん著：魔法戦記リリカルなのは～逆心を抱く戦闘機人～】

年齢：17

髪型：赤色で二頭

外見：藍色でやや釣り目がち。身長は中くらい

性格：やや面倒臭がりだが、人のピンチは放つておけない

備考：生徒会書記。ハヤトやルーク達と仲が良く、よく一緒にゲームをやっている。

御剣の胃薬摂取量が増える原因その4

第3話までの登場キャラクター紹介（後書き）

とつあえず、簡単なプロフィール紹介をやってみました。
どうせ、ラモンです。

年齢などは、もちろん訓練校の話ですので原作どおりではなく、ある程度若返つたり年を取つてもらつたりしました。
魔力ランクなども一応決まっていますが、多分殆ど関係ないので載せておりません。

うーん、やっぱり「レだけ人数が多いと、流石に被っちゃう部分がありますねえ。画像などがあればいいんですけど……（汗）
まあ、細かいところは本編中で書き表せるように頑張ります。

一応作者の皆様の名前と作品名を載せておきましたので、詳しいプロフィールなどが見たい場合は、原作の方で確認していただければ幸いでござります。

それと作者の皆さんへ。

このプロフィールなどで訂正して欲しい部分がありましたら、感想やメッセージで訂正箇所を教えてください。すぐに訂正致します。

ではでは～。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5850x/>

陸士訓練学校のドタバタな日常

2011年11月4日09時46分発行